

タイマイ養殖の事業化に向けてさらに前進

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 與世田, 兼三 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008589

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



ちゅら海便り

— タイマイ養殖の事業化に向けてさらに前進 —

石垣支所長 與世田兼三

タイマイは主に熱帯や亜熱帯の珊瑚礁域に生息するウミガメの仲間で（写真1）、国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで近絶滅種に分類されています。タイマイはその甲羅の色彩模様の美しさから、工芸品の原料として世界で広く利用され、日本でも伝統工芸であるべっ甲細工の原料として古くから利用されてきました。しかし、生息環境の悪化あるいは乱獲などの影響によって資源が減少したことから、ワシントン条約（CITES）によりタイマイの国際的な商取引が禁止になりました。このため、べっ甲細工の原料を主に海外からの輸入に頼っていた日本のべっ甲産業は、原料の確保が困難となり、危機的な状況に陥っています。このような背景の中、タイマイなどのウミガメ類の資源を維持・増大させるためには、単なる保護だけでなく人為的に増殖させ、積極的に資源の回復を図る必要性が指摘されています。このため、石垣支所・栽培技術開発研究室（八重山栽培技術開発センター）では、国の施策としてウミガメ類、とりわけタイマイ資源の回復を図るための基礎的な増養殖技術の研究開発に取り組むことになりました。平成16年には5年間陸上水槽で長期間養成した2頭の雌から合計894個の卵を得ることに成功しました。2頭の雌ガメは循環飼育水槽（250kℓ）に隣接した人工海浜で産卵しました（写真2）。国産の履歴の確かな親

を長期間養成し、人工環境下で産卵に成功したのは世界でもあまり例がありません。平成18年には、また同じ2頭の雌から合計910個の卵を採卵することができました。この結果から、自然水温（20～29℃）で飼育した場合のタイマイの産卵周期は2年であることが判りました。一方、天然では2～3年周期で産卵するとの報告があります。タイマイ養殖の事業化に向けては毎年安定的に卵を得るための技術開発がとても重要です。そこで、産卵した2個体はいずれも冬期（11～3月）には体重が増加せず、翌年の産卵が見られなかったことから、「成熟・産卵には水温が関与しているのではないか」との仮説を立て、冬期（18年10月～19年3月）の水温を26℃に維持して産卵した2頭の雌ガメを飼育してみました。その結果、産卵後に減少していた体重が（A；63.8kg B；64.2kg）、いずれも1年で増加しました（A；70.6kg B；68.8kg）。そのうちの1頭（B個体）は18年の産卵後に退縮した卵胞が再び発達し、19年には雄と交尾し、合計416個の卵を得ることができました。このように、2年サイクルの産卵周期から1年サイクルで産卵させることができる技術に目途が見えてきました。この成果は、タイマイの資源回復策と養殖の事業化に向けて大きな前進です。



写真1 水槽内を元気に泳ぐタイマイ



写真2 人工海浜付きタイマイ育成水槽（手前が産卵用の海浜、奥が飼育水槽）